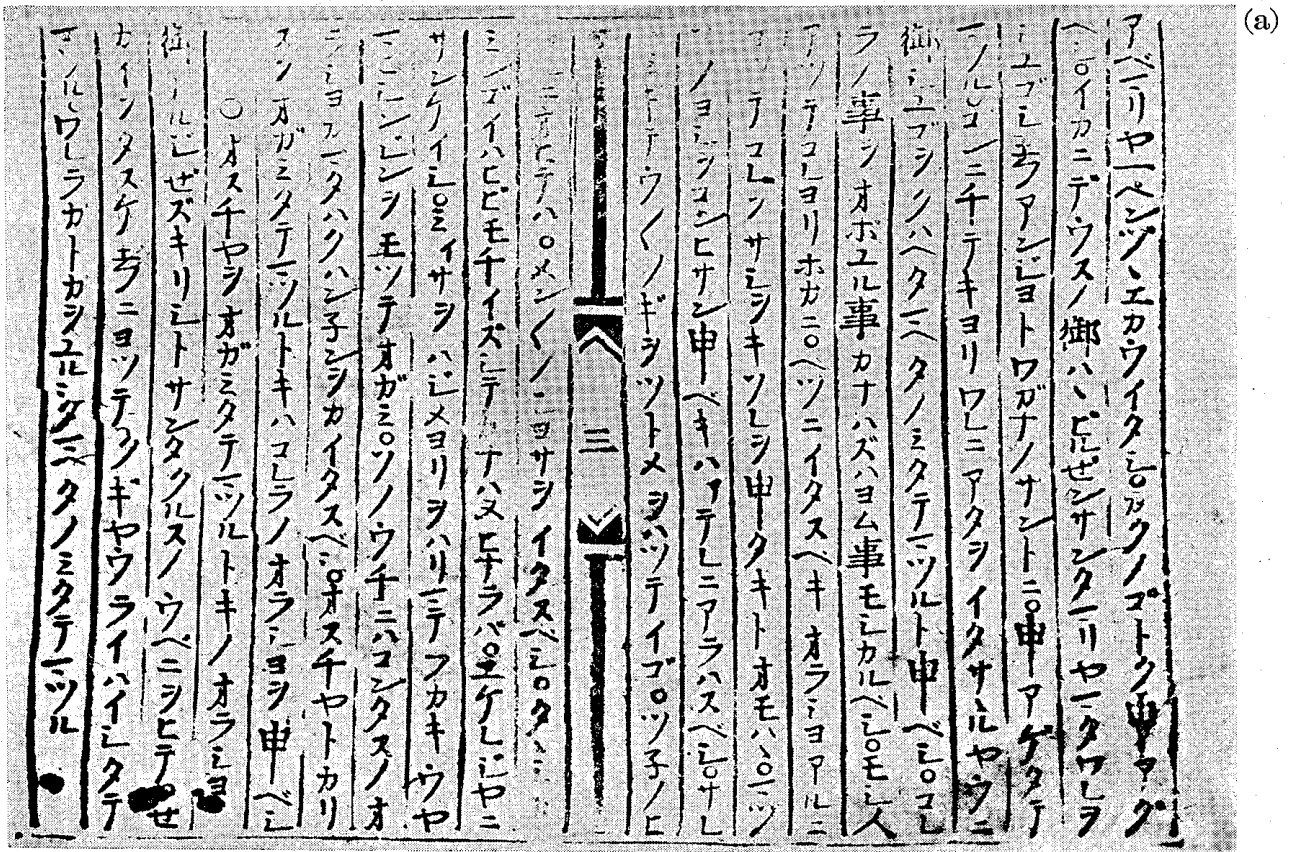


Title	耶蘇會版特にその日本字印刷物について
Sub Title	
Author	幸田, 成友(Koda, Shigetomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.2/3 (1939. 11) ,p.151a(337a)- 166(352)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿繪:片假名活字を使用した耶蘇會出版物の斷片 占部博士古稀記念號
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19391100-0151">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19391100-0151</a>

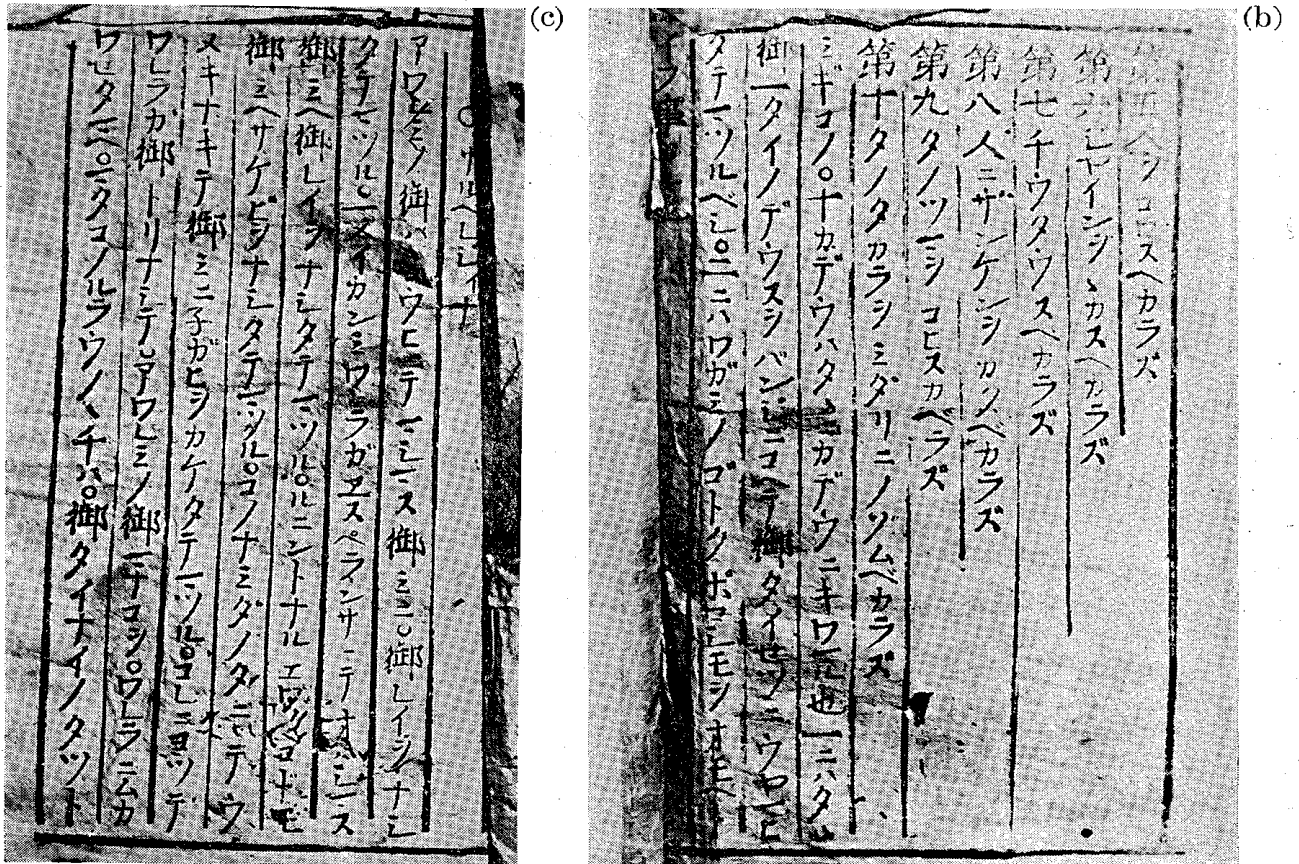
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

片假名活字を使用した耶蘇會出版物の断片



(a) 倭漢朗詠集の表紙の中から



(b) と (c) サルバトール・ムンヂの表紙の中から

# 耶蘇會版特にその日本字印刷物について

幸 田 成 友

サー・アーネスト・サトー氏が一八八八年に十四種の日本耶蘇會版を紹介せられた。それから五十年を経た今日に至るまでに更に十二種が発見せられ、合計二十六種となつた。

是等の耶蘇會版をその印刷に使用せられた文字の上から分類すると、ローマ字を用ひたものが十六種、日本字を用ひたものが十種となる。こゝに日本字といふは漢字と假名とを混用したものを指す。自分は耶蘇會版、特にその後者に關し、卑見を下文に發表するに當り、先づその書名を列舉しよう。

- (一) <sup>1</sup> ども<sup>2</sup>ら<sup>3</sup>ま DOCTRINA      バチカン文書館
- (二) <sup>1</sup> 「臨終の用意」      大阪 飯島幡司氏
- (三) 落葉集 RAGYOKU      日本學林 一五九八 大英博物館ライデン圖書館
- (四) <sup>2</sup> 「サルバートル・ムンヂ」<sup>3</sup> SALVATOR MYNDI      日本學林 一五九八 カサナテンセ圖書館
- (五) <sup>3</sup> ぢやぢるの<sup>3</sup>と<sup>3</sup>終<sup>3</sup> GVIA DO PECADOR 二冊      日本學林 一五九九 大英博物館パリイ圖書館等

耶蘇會版特にその日本字印刷物について(幸田)

- (六) 倭漢朗詠集 ROYEI ZAFIT 日本學林 一六〇〇 エスコリヤル宮文庫
- (七) ぞちり那きりまたん DOCTRINA CHRISTAM 長崎後藤登明 一六〇〇 カサナテンセ圖書館
- (八) 太平記拔書 六冊 故内野五郎三氏
- (九) まんてむ邦をむん地 CONTENTPTVS MVNDI 京都原田アントニオ 一六一〇 故林 若吉氏
- (一〇) ひてその經 FIDES NO QVIO 長崎後藤登明 一六一一

ゴアにゐたパードレ・アレッサンドロ・バリニヤニが第一回の遣歐使節を送つて長崎に着したは一五九〇年七月である。彼が携へた印刷器械は、長期に亙る一行のマカオ滞在中、既にボニフハシオの青年訓 CHRISTIANI PYER INSTVTIO, 1588 及びサンデの遣歐日本使節記 DE MISSIONE LEGATORVM IAPONENSIVM, 1590 二部を印刷してゐる位故、日本へ輸入されてから間もなく活動を開始し、一五九一年は加津佐の耶蘇會學林において一部、一五九二年から九六年へかけ、天草の耶蘇會學林において六部を出版してゐる。但し是等は皆日本語で書かれてゐるに拘らず、バリニヤニが將來したローマ字活字を以て印刷されてゐる故、日本文字によつて、より深く日本語を知らんと欲する外國人にとつても、より深く切支丹の教義を知らんと欲する内地人にとつても、不充分であつた。日本文字による日本語の教義書字引の類が内外人雙方によつて待望せられたことは言ふまでもあるまい。

1 扉が無いので正確の書名が分らない。

- 2 日本語の書名を明らかにせぬ、扉が脱落したのであらう。
- 3 丸善株式會社に本書の上巻がある、一九二六年マツグスの目録に出た下巻は、前葡萄牙王マヌエル殿下が買入れられたといふ。
- 4 ローマ字の書名を明らかにせぬ、扉が脱落したのであらう。
- 5 一九〇七年、ベルリンのポール・ゴツチャルクの目録に出で、シカゴのグンター氏が買入れたことをヨハネス・ラウレス師から承つた。今所在を詳にせぬ。

6 一五九六年刊行の三部中、エクセルシチア・スピリツアリヤだけが天草版である。

彼等の需要に應じて最初に印刷せられたのが、(一) どちらいな及び (二) 臨終の用意であることを自分は主張する。兩書とも刊年や刊行地の記載を缺くを以て、この主張に對し直接の證據を擧げることには出来ないが、間接の證據は二三に止まらない。

整版は平面に文字を彫刻する故、これを印刷すれば、文字の墨色は一樣である。初期の活字版は活字の高さに若干の相違が生じ易いため、これを印刷すれば、文字の墨色は強弱を生ずる。この定則によつて兩書を見れば、兩書は確に活字印刷である。更に兩書を比較すれば、雙方に使用してある行草の漢字及び平假名が全然同一であることに心附かう。これは兩書の印刷時期が多分に懸隔つてゐない證據である。さうしてその印刷に使用せられた活字が木製であると認定するのは、文字を構成する線又は點の輪廓が鮮明を缺くのみならず、日本・朝鮮・及び支那においては、木活字が金屬活字に先立つといふ歴史的事實があるからである。

九州の片隅にある加津佐や天草で耶蘇會の出版物が續出する頃、古くから日本文化の中心ともいふべき京都において活字印刷が始まつた。豊臣秀吉の朝鮮征伐の結果、彼の地の活字印刷術を傳へたのが起原となつた。文獻によれば一五九二年後陽成天皇が活字を以て古文孝經を御印刷になつたとあるが、不幸にしてその版本は未だ見出されぬ。然し一五九六年以後、朝廷、幕府、有力諸侯、寺院、豪商等によつて出版せられた活字版は實に夥多しい數に達し、さうしてそれ等は皆木活字を以て印刷せられた。朝鮮征伐の時朝鮮で行はれてゐたのは銅活字であるのに、それを傳へた日本人が木活字を使用しては、順序轉倒の嫌があるが、木活字製造は容易であり、従つて迅速に印刷の成果を擧げ得るからであらう。一六〇六年徳川家康が銅活字九萬千餘箇を禁中に獻じた文獻<sup>2</sup>はあるが、これによつて何が印刷せられたかは不明である。日本で銅活字を以て印刷したのは一六一五年の大藏一覽集<sup>3</sup>二十冊を嚆矢とする。

1 時慶卿記 文祿二年閏九月、十月、十二月(川瀬一馬氏 古活字版の研究一五三―一五四頁)

2 慶長日件録 慶長十一年六月六日(川瀬一馬氏 前掲一九〇―一九二頁)

3 本光國師日記 慶長二十年三月、四月、

耶蘇會學林においても之と同じく、金屬製のローマ字活字を有しながら、日本字の印刷には先づ木活字を製造使用した。さうして一五九八年の(三)落葉集及びその以後の出版物は、(一)及び(二)と全く別種の改善せられた活字を用ふるに至つた。(一)及び(二)が一五九八年以前の出版であることは疑

を容れない。

一五九二年十一月に日本に於ける耶蘇會所有の住院及び分駐所カサ レッヂンシヤの所在地と、これに住するパードレ及びイルマンの氏名とを調査録上した目録1がある。同書―天草の學林及び修練所の條に、

(一〇六) イルマン・ジョアン・バプチスタ、伊太利人、我々の文字の印刷師、日本語を極めて僅か知つてゐる。

(一〇八) イルマン・ペドロ、日本人、日本の文字の印刷師、日本語以外を知らない。

1 大英博物館 追加寫本九八六〇號、この一項は廣島の土井忠生教授の示教による。

とある。耶蘇會出版物は、前後二十年に互つたが、その初期のローマ字印刷工として、ジョアン・バプチスタ、日本字印刷工としてペドロを知り得たは甚だ愉快である。これによつて(一)及び(二)は一五九二年また同年以後の出版であらうと推定する。

書物の扉にビニエツトとして小銅版畫を貼付することは、十六世紀後半の出版物に往々見る所である。本邦初期の耶蘇會ローマ字版も亦之に倣ひ、一五九一年版のサントスの御作業には鍵を持てる聖ピーターを中心とし、その周圍に諸聖人や殉教者を描いた小銅版畫が上下卷の扉に貼付けてある。一五九二年版の下チリイナ・キリシタンには十字架の立てる地球を手にした耶蘇の全身圖、同信心録には、聖トーマが耶蘇の身體を検する圖、同口譯平家物語には王冠を戴いた勇士が戰車に乘じ凱旋する圖が貼付けて

ある。この以後の出版物中銅版畫のあるのは一五〇七年のスピリツアルの修行だけで、これには扉のみならず、二十七章より成る本文每章の首に銅版畫があつた筈であるが、現在では、僅に五枚を存するに過ぎぬ<sup>1</sup>。さうしてそれ等の銅版畫は前記初期の銅版畫に比し、畫法においても製作上の技巧においても少からず劣つてゐるやうに感ずる。

1 長崎公教神學校浦川和三郎氏の示教による、本書の書名中 *Xuquan* に從來數卷又は珠冠の漢字が當てられてゐるが、自分は贊成しかねる、同書の序文に *O livro chamado manual de diversas meditação* とあるから、種觀又は殊觀の文字を宛つべきであらう。

日本字印刷の耶蘇會版中、銅版畫のビニエツトを有するは(一)のみである。(二)は扉を缺くからその有無を明言し難い。(一)の銅版畫は十字架の立てる地球を手にした耶蘇の半身圖で、その畫法技巧から見て、初期銅版畫に屬することは疑を容れない。これを前掲ドチリイナ・キリシタンの銅版畫と對照すると、後者は全身、前者は半身、後者のバックにあるエルサレム市の遠景は前者に無く、「我は道なり眞理なり生命なり」といへる聖ヨハネ福音書第十四章の文句が、後者は圖の下に、前者はその周圍にあるだけの相違だ。かくまで類似した銅版畫を貼付けた兩書の間、何等かの關係を想像し得ぬであらうか。

ドチリイナ・キリシタンは耶蘇會出版物中最も需要が多かつたと見え、現存耶蘇會版二十五種中四種



を占め、前記二版の外、一六〇〇年出版のローマ字本が水戸侯爵家に、同年の日本字本（七）がカサナテンセ圖書館にある。この両者が全然文句を同じうし、さうして同年に發行せられてゐる所から推すと、一五九二年のローマ字版とそれと殆んど文句を同じうせる日本字版（一）とは同年の印刷ではないか、縦令同年でなくとも、兩書相續いて出版せられたものであらう。

一五九二年版のドチリイナには、扉の前にある白紙に、日本の巡察使即ちアレッサンドロ・バリニヤニから、本書をエボラの大僧正ドン・テオトニオ・デ・ブラガンザ師に贈るといふ意味が記されてゐる。これと同様な贈呈の辭が（二）臨終の用意にもある。生憎雙方共に年月が記されて居らぬから、同時に贈呈せられたか否かは明言し能はぬ。然しながら（二）が一五九四年の印行であらうといふことは、夙に姉崎教授が主張せられる所で、教授は一五九四年長崎で印行になつた四種の小冊子の書名を列擧し、その中「臨終用意の棗」とあるものが（二）に當ると言はれてゐる。<sup>1</sup>教授の所説の前半は、<sup>2</sup>デルプラースの記事に據られたと考へる。果して四種の小冊子の出版地が長崎であらうか、それについては自分は尙疑を抱く者であるが、後半の推定には賛成である。

1 姉崎正治氏 切支丹傳道の興廢 三八四—三八五頁。

2 Delplace, L. *Le Catholicisme au Japon*. Vol. I, p. 272.

かく論じ詰めて見ると、（一）及び（二）は一五九二年乃至一五九四年に出版せられたもの、日本字で

印刷せられた耶蘇會版中最も古いものであるといへよう。

京都を中心とする活字出版物は、最初主として漢籍佛書の翻刻に従事したため、楷書の漢字の活字のみを製造使用したが、次いで國書の印刷が起るに及び、假名活字を製造使用するに至つた。假名に片假名と平假名との二種がある。片假名は漢字の扁旁から作つたもので、漢字同様點と線とから成る故、漢字活字の製造に熟した上は、片假名活字を製造することは容易である。之に反して平假名活字は行草體の漢字から出で、主として曲線から成る故、その活字の製造は比較的困難である。加之正楷の漢字と平假名とを混用しては甚だしく調和を缺く。平假名活字を用ふるとせば、行草體の漢字を作る必要がある。故に圖書の刊行には、順序として先づ片假名活字が行はれ、平假名活字が之に次いだ。片假名活字で印刷したもので刊年の明白なのは、一六〇三年富春堂刊行の太平記二十冊があるが、平假名活字で印刷したものになると、それから數年遅れ、解紛記といふ刀劔書三冊、それが一六〇七年の出版である。但しそれ以前に若干の謠本や舞の本があつたことは認められるが、刊行年次が明白でない。

1 川瀬一馬氏 前掲二三三頁、四〇一—四〇二頁。

活字の製造及び使用が、正楷の漢字から行草體の漢字へ、片假名から平假名へ進むのが順序であるとすれば、耶蘇會出版物だけこの順序を破り、直ちに行草體漢字と平假名とを混用せる(一)(二)を出版したであらうか、疑はしい。

(四) サルバートル・ムンヂの表紙裏に正楷の漢字と片假名で日本紙に印刷した破片が二枚見える。これはサトー氏が早く注意した處であるが、その後、(六) 倭漢朗詠集の表紙裏にも同様なものが一枚(イ)出た。この方は全紙で四周を單線で限り、半面十行、行毎に界線があり、版心に三といふ丁附がある。サルバートル・ムンヂの表紙裏に見える分は、或一枚の右半十行分(ロ)と或一枚の左半八行分(ハ)とで、版心が存せぬから、両者が箇々のものであるか連続したものであるかさへ不明である。(ロ)には十誠中第五誠から以後が記され、(ハ)にはサルベ・レジイナの首部、(イ)には聖餐オスチャを拜み奉る時の祈禱オラシヨ文がある。以上三點は確に或一冊を成したものの破片に相違ない。

1 Setow, E. M. The Jesuit Mission Press in Japan, 1888. p. 36.

耶蘇會版の表紙裏からその他の耶蘇會版の破片が出ることは決して珍しくない。表紙の心として廢紙を利用したまでである。アルバレスのラテン文典のそれからぎや・ど・ぺかどるの數葉、太平記拔書のそれから落葉集の數葉が出た。一五九二年版のドチリイナ・キリシタンには、もとサントスの御作業の十數葉がその表紙の心となつてゐたといふ。若し最初の裝釘のまゝの耶蘇會版の表紙の心を一々検査するを得たら、そこに意外の發見があるかも知れぬ。それにしても皮製の立派な西洋風の製本である(四)やアルバレスのラテン文典の表紙裏から、耶蘇會版の破片が出たのだから、この裝釘は日本で行はれたと言はざるを得ぬ。耶蘇會印刷所にはかゝる熟練な裝釘師を有したものであらう。

印刷から製本へと進む。表紙の心となつた耶蘇會版は、その表紙を附けた耶蘇會版より古く印刷せられてゐるのが當然である。(四)及び(六)の表紙裏から出た片假名本の印刷は、兩者の中比較的古い(四)の出版年代、即ち一五九八年か、若しくはその以前でなくてはならぬ。尙その上に日本における活字印刷の順序から推して、自分はこれを平假名活字で印刷した(一)(二)以前に置き、日本字を以て印刷した耶蘇會版中首席を占むるものと認めたいのである。

1 橋本進吉氏 文祿元年天草版吉利支丹教義の研究 解説二四頁。

2 カサナテンセ圖書館所藏のアルバレスのラテン文典(一五九四年版)からぎや・ど・べかどる(一五九九年版)の破片が出たのは、この順序に反するが、これは前者の製本が、偶々後者の出版より遅れた特別の場合と解すべきであらう。

一五九八年(三)落葉集の出版を以て、耶蘇會の日本字印刷は格段の進歩を示した。落葉集は一口に言へば日本語の字引である。第一部は音により、第二部は訓により、漢字をいろは別に標出し、第四部は十二類に分けた漢字を扁旁によつて標出し、さうして是等の漢字の左右には常に平假名を以て音又は訓を施し、時として別訓をこの下に註してゐる。それから第三部は日本支那の官職名及び日本六十餘州の國名を擧げ、その發音を平假名を以て右旁に示してゐる。要するに漢字に平假名を振る印刷が落葉集に初めて見えるので、この風は本書と同年に出版せられた(四)及び翌年出版の(五)の卷末の集字に見え、一六〇〇年出版の(七)には本文中の漢字に屢々假名をつけてゐる。漢字と振假名との大小の比は一と

四合一である。

(一)(二)に使用せられた漢字や平假名は多分に筆寫の文字の姿を残してゐる。之に反して(三)の漢字や平假名は頗る型式に囚はれ、一箇の文字としては興味が薄い、活字としては所謂粒が揃ふ點において優れてゐる。半濁音<sup>1</sup>びぶ<sup>2</sup>の活字が初めて本書で用ひられたことは、言語學史の上から、また印刷史の上から見て、特筆大書すべき價值がある。漢字同大の平假名が本書で用ひられた場合は極めて少いが、その少い中に二字三字の連續活字を可成多數に發見する。

1 新村出氏 南蠻廣記 二五〇頁。

此の如く種々の新しき試が落葉集印刷に際して行はるゝに當り、活字製造の材料のみは依然として木材であつたらうか。耶蘇會學林はバリニヤニが將來した金屬活字や印刷器械を左右に有し、前者の堅牢耐久と後者による印刷鮮明の利便とを熟知しつゝ、尙且つ之に倣はんとする考を起さなかつたであらうか。自分は耶蘇會學林の日本字印刷物中(三)及びその以後の分<sup>(九)を除く</sup>は、金屬活字及び印刷器械を使用したものであらうといふ考を、屢々起し屢々自ら打消した。

バリニヤニが輸入した印刷器械が手刷器械であつたことは言ふまでも無い。恐らくは伊太利製であつたらう。この器械でマカオで刷つたサンデの遣歐日本使節記の印刷面は縦十四センチ横十センチで、八頁毎に折記號 Printed Alphabet があるから、四頁掛の器械であつたらう。それは美濃紙一枚を掛けて

耶蘇會版特にその日本字印刷物について(幸田)

若干餘裕がある。京都中心の活字印刷は整版を刷るやうにばれんで印刷した。木活字の高さが容易に一定しないため、墨附に濃淡がある。銅活字を用ふるに至つても矢張手刷であつたため、木活字印刷よりも一層強く濃淡が残るやうな不手際を示した。耶蘇會學林では、ばれん手刷の方法以外に、印刷の際適當の壓力を加へ得る何等かの方法——例へば手を以てローラーを紙上に廻轉するが如き——を取つたであらう。(五)及び(七)の如く文字鮮明にして印刷の力強きを見ては、どうしてもかく感ぜざるを得ない。アジユダ文書館でその風姿に接したフレイタス氏論文の翻譯に「<sup>1</sup>日本文字印刷機」とあるが、原文は何とあるか、知りたいものである。

金屬活字製造の如きは文献の上から證明し得ぬのみか、この考を打消すに足るやうな別の事實が存在する。(三)以外に頻々として見える連續活字の使用である。二字若しくはそれ以上の平假名連續活字の使用は、京都中心の活字印刷物にも見えるが、その使用は耶蘇會版より遅れ、「慶長十五年<sup>庚</sup>七月十三日」の墨書識語ある嵯峨本方丈記を以て第一とする。さうして同書のみならず以後連續活字を使用した分は、すべて木活字を以て印刷せられてゐる。之と同じく耶蘇會版に使用した連續活字も亦木製であらう。連續活字が木製であつたとすれば、箇々の活字も亦皆木製であつたに相違ない。

1 木下奎太郎氏 えすばにや・ぼるつがる記 三六三頁。

2 川瀬一馬氏 前掲六四四—六四七頁、四四三—四四四頁。

一五九六年から一六〇〇年までに出版せられた耶蘇會版九種 ローマ字版四種  
日本字版五種 中、一五九六年天草版のエ

クセルシチア・スピリツアリア及び一六〇〇年長崎後藤登明刊行の(七)どちりなきりしたんを除き、その他はすべて耶蘇會日本學林となつてゐる。また一六〇三年から一六一〇年までに出版せられた耶蘇會ローマ字版六種中、一六〇三年のアフォリズムに日本學林とあるを除き、その他はすべて長崎學林とあり、さうして一六一一年出版の(一〇)ひですの經に至り、再び後藤登明の名が現はれて來る。これは何を意味するか。耶蘇會印刷部の中でローマ字部と日本字部とが分離した結果ではなからうか。

前に一言したフレイタス氏の論文中、一六〇〇年八月廿五日附の手紙を引用し、「日本文字印刷機を本年前記印刷所より取離し、長崎の有力者の一人なる教徒に委託致し候」とある。前記印刷所とは從來ローマ字日本字雙方を印刷した長崎の耶蘇會印刷所であり、また有力なる一教徒とは後藤登明を指すに違ひない。同人の氏名を掲げた(七)が一六〇〇年の刊行であることを思合はすべきである。一六〇六年の日本耶蘇會名簿に印刷部の監督パードレ・ニコラオ・ド・アビラ、印刷師パードレ・ジョアン・バプチスタとある。後者の氏名はローマ字印刷者として夙に一五九二年の名簿に見えるが、當時彼と肩を並べた日本字印刷者イルマン・ペドロの繼承者は本名簿に見えぬ。日本字印刷部は確に分離したのであらう。

1 木下柰太郎氏 前掲三六三頁。

耶蘇會版特にその日本字印刷物について(幸田)

2 Boxer, C. R. Some Aspects of Portuguese Influence in Japan. *F. J. S. L. Vol. XXXIII*, pp. 44—45.

(八) 太平記拔書六冊の刊行年次及び出版所は不明である。恐らくはそれ等を記した扉が脱落してゐるのであらう。サトー氏は本書の認可狀に署名してゐる日本の司教はセルケイラで、彼は一六一四年二月二十日に逝去してゐるから、その以前の刊行だと言はれる。これは正しい。山田孝雄教授は本書以外日本司教の署名ある耶蘇會版三種<sup>一六〇二年、一六〇四年、一六〇五年</sup>を挙げ、一六〇二年以後二三年の間を下らざる時期に出版せられたものであらうと言はれたが、この推定は薄弱だ。

1 Satow, Sei. E. M. *The Jesuit Mission Press in Japan*. F. A. S. J. Vol. XXVII, Pt. II (1899)

2 山田孝雄氏 耶蘇師の太平記 藝文第三年上第三號。

(三) から (八) までは同一活字で印刷したものである。(一〇) はたゞ扉の寫眞を見るのみであるが、それが (五) (六) (七) の扉と意匠において甚だ類似してゐること、極めて少數であるが、扉の文字が雙方一致すること、出版者が (七) と同一であること等から推して、(三) — (八) と同一活字を使用したものと推定し得られる。

(九) こんてむつすむんぢに就いては、自分は所藏者林若吉氏が原書の數葉を影印裝釘して惠與せられた一冊を有する計である。今之を取つて (五) と比較すると、雙方共に美濃判十七行、本文中間にロ一マ字を交へ、卷頭の扉の如きは彼我殆んど趣向を同じくしてゐる。然し仔細に検討すると、日本字の



字體に些少の相違があり、裝飾に用ひられたカットに些少の相違があり、ローマ字に至つては著しく相違する。(五)及び(九)は決して同一の活字で印刷したものではない。若し然らずとせば、(九)を京都で印刷した後、活字を長崎に輸送して、翌年(一〇)を印刷したか、或は活字が非常に豊富にあるので、之を京都長崎に分ち、(九)(一〇)を引續いて出版したことになる。この條件は甲乙とも成立すべくもない。(九)は全然別派の木版活字で印刷せられたものと信ずる。

京都を中心とする活字版も九州の耶蘇會版も、一六〇五年に至るまではすべて墨刷であつたが、本年に至り長崎學林で出版したローマ字版のサクラメンタに朱墨兩様の印刷が試みられた。歐洲では珍らしからぬことであらうが、日本では破天荒である。日本の色刷はそれより二十二年を経た一六二七年に至り、初めて實行せられた。吉田光由著の塵劫記(數學の書)がそれで、表紙裏に樹木を書き、幹や葉の輪廓に墨、葉に緑、花に丹を用ひてゐる。但しこれは整版による着色であることを附言して置く。

かく列擧して見ると、耶蘇會の活字出版物は、京都中心の活字出版物に比し、印刷史上多くの點において優れてゐる。金屬活字及び印刷器械の使用において、書物出版の年代において、木製の行草體の漢字及び片假名、平假名、半濁音、振假名、連續活字の製造使用において、銅版挿畫の彫刻及び印刷において、色刷において或は一步を先んじ、或は他の容易に追及し得ざる所を爲した。然しながら京都中心の活字出版物は朝廷、幕府、諸侯、寺院の外、民間の有志又は書林の手に成り、書籍の種類、部數、冊

數の多いことは、耶蘇會版と比較にならぬ程である。従つて活字の大小や字體は甚だバライチャーに富んでゐる。銅版畫は無いが之に代る木版畫があり、色刷は無いが用紙に色紙を用ひ、更にその上に雲母で模様を描いたものさへあつた。若し両者が相接觸し、長短相補ふことが出來たら、文化の進歩は更に幾段を加へたらう。接觸の機會は原田アントニオが京都でこんてむつすむんぢを印刷した時に到來したと考へる。然しこの好機會を捉へるものは無かつた。京都中心の活字印刷は朝鮮から傳はり、耶蘇會林の活字印刷は西洋から傳はり、兩者箇々に發達したまゝ、一方は慶長を極盛時代として漸く寛永の整版時代に入り、他方は幕府の迫害により一六一一年以後その出版物を見ざるに至つた。

(昭和十四年一月末日)